

ヴォルフガング・ハックル氏 講演会報告

宇 野 将 史

さる平成 17 年 5 月 16 日に早稲田大学ドイツ語学・文学会主催で、インスブルック大学助教授ヴォルフガング・ハックル氏の講演会が行われた。題目は „Die Erben des Törleß. Österreichische Internatsgeschichten von Josef Haslinger bis Wolf Haas“ で、講演内容はローベルト・ムージルの処女作『士官候補生テルレスの惑い』から出発して、戦後のオーストリア文学にいたる寄宿舎を舞台とした小説を、その傾向や多面性を論じつつ紹介するというものであった。

司会進行は早稲田大学ドイツ文学科シャイフェレ教授で、まずハックル氏の紹介から始まった。経歴を簡単に紹介しておこう。1953 年にオーストリア中部オーバーエースターライヒ州のバート・レオンフェルデンで生まれ、インスブルック大学で神学・哲学・ドイツ文学を専攻し（文学部講師ジャコムツィ氏とは学友であったらしい）同地で博士号を取得された後、„Eingeborene im Paradies. Die literarische Wahrnehmung des alpinen Tourismus im 19. und 20. Jahrhundert.“ という興味深いテーマの論文でドイツ文学の教授資格を取得された。その後ピサ大学の文学部でドイツ語・オーストリア文学の講師を務め、DaF の分野でも研究活動を進められた。84 年からインスブルック大学に務められ、99 年に同大ドイツ文学科の助教授に就任されている。その他に雑誌 „Ö DaF-Mitteilungen“ の編集長を務めるなど、各方面で精力的な活動を繰り広げておられる。

（詳細は http://www2.uibk.ac.at/germanistik/mitarbeiter/hackl_wolfgang/ を参照）

講演は 6 部からなり、最初に講演全体を貫くテーマを紹介した後、ムージルの『士官候補生テルレスの惑い』による問題提起が行われた。すなわちこの小説は、ヴェーデキントやヘッセも著したような寄宿舎を舞台とした、青年の危機や悩み、葛藤を表現した、それまでのいわゆる青春小説のあり方、すなわち少年が目の当たりにする理不尽や性の悩みといった、個人の苦い思い出を単に赤裸々につづるといった手法にとどまらず、むしろそうした青春物語的な「内容」に加えて、現代のオーストリア文学にも連なる新しい「語り」の特徴を兼ね備えているのである。確かにこの小説はムージル自身の体験に基づいているのだが、後にムージル自身が語っているように、当時の大方の評価とは異なり、ムージルの文学の中でこの小説は副次的な位置を占めるに過ぎないものである。比較対象としてアロイス・ブラントシュეტターズの『ペトリヌム』が取り上げられた。この小説では青春小説にはつきものの素材（家族、ホームシック、階級社会など）が登場するものの、むしろ修辞法にみられる形式的な新しさといった特徴に興味が惹かれる。

次に取り上げられたのは、バーバラ・フリッシュムートの『修道院学校』（1968 年初版、1978 年に改訂版が出版され、79 年にフェミニズム的な観点からさらに改定が施される）。ここではカトリックの女学校が舞台となっているのだが、物語の進行は時系列的ではなく、

14の章からなるこの小説のおよそ六割が、規律や聖書の文言などからの多数のモニタージュ、引用からなっていて「語り」は残りの四割に過ぎない。それにより語り手である「私」との相対化がなされ、かえって語り手の体験した理不尽や葛藤が赤裸々にあぶりだされるという効果を生み出しているのである。

続いてはトーマス・ベルンハルトの『原因、解釈』が取り上げられた。これは著者自身の五巻からなる自伝集の第一巻で、彼を「スキャンダルを書き手」と評せしめたジャンルである。この小説も時系列的に「語り」は進行せず、表題の示すとおり物語は、注釈、独白、引用、報告の挿入、そして語り口や形式など様々な文体の変化によって破壊されている。これも単なる自伝的な作品にはとどまっていない。ベルンハルトの小説も、さらに高度な言葉の水準を獲得している。この小説の特徴としては、崩壊に瀕した世界において、言葉による新たな構築の可能性を探ることで新しい地平を開拓したことにあるといえる。次に取り上げられたのは、ヨーゼフ・ツォーデラーの『手を洗うことの幸せ』（1976年南チロルの小さな村で初版発行、82年にミュンヘンで公刊され、84年にハンザー社から出版）。この小説は南チロル地方の方言で書かれており、さらに82年に映画化されている。人物描写や語り口の点ではどちらかという伝統的な手法にのっとってはいるが、過去の記憶がフラッシュバックして物語の進行が中断している点や、特に自らの体験を描写する際に、主観を取り払って実際の出来事から距離をおいて客観化・相対化するという語り口に特徴が見られる。この小説では自己のアイデンティティの探求が教養小説的なテーマとして取り上げられるのではなく、故郷の喪失といった同時代的な社会問題が織り交ぜられている。だが前述の二つの作品のような、極端に一貫しない時系列といった手法は用いられてはいない。

ハックル氏はこれらの三作品の分析を踏まえた上で、テーマ的な観点からと同時に同時代の語り方や文学的描写、事実の伝達がどのようになされているかといった問題提起を行った。その際にペーター・ハントケの長編小説『反復』からの引用を踏まえ、結局は寄宿舎での個人的な体験という「内容」よりもその「語り」の変化こそが注目すべき点であり、特に60年代から70年代にかけて古典的な自我意識のあり方はいったん葬り去られたものの、80年代に入ってから「自己」の「主観的な」語りにも再び目が向けられたことで「語り」の危機が克服された経緯に触れている。そのような新しい文学の潮流に上記三作品は位置づけが可能なのだが、ここではもはや伝統的な文学のあり方とは異なる読みのテクニックが要求されている。かつてのように、書かれたままに読むのではなく、読むに際しても高度な水準が要求されており、そしてそのような「アクティブな」読みの中に、ハックル氏は外国語教育、とりわけランデスクンデを扱う際においても新たな可能性を期待しているのである。

最後に1999年にインスブルック大学にて博士号を取得された今井敦氏の仕事に言及され、トーマス・マンの『ブuddenブローク家の人々』のような政治的な背景を念頭に置いた寄宿舎小説の読みの可能性を強調され、ヴォルフ・ハースの『シレンティウム!』を手がかりに、これまで述べてきたような「語り」の変遷を踏まえた上で、現代でもこのジャ

ンルは大いに生産的であると締めくくられた。

続く質疑応答では、オーストリアでの寄宿舎の歴史についてや、英文学、仏文学における同じようなジャンルとの比較についての質問や問題提起などがなされ、活発な議論が繰り広げられた。特に興味深かったのは、男女共学の寄宿舎というのは、おそらく存在しないということ。そもそも寄宿舎が設立された経緯は、大学進学を念頭に置いたエリート教育を受けるチャンスのない地方の子供達にもそのための機会を与えようというものであったが、70年代以降教育改革が行われ、社会民主党が地域ごとにギムナジウムを創設し、実業学校も地域ごとに開設されるなど、どの地域でも大学進学可能なレベルの教育を提供するようになったということ。

日本のドイツ文学の中ではあまり取り上げられることの少ない、オーストリア現代の寄宿舎文学というジャンルにおける、社会史的な考察と、文学の要である「言葉」そして「読み」の問題を分析し、そこから外国語教育の新たな可能性にまで広がる氏の研究は、大変に興味深いものであった。